

上記各種の他は今回の調査による採集量は僅かであるが、各種ボラ類、グルクマ、アジ類、タカサゴ類、ヒメジ類も適当な大きさの幼魚期のものは餌として使用可能であり、しかも集魚灯を用いた漁法による採捕が可能である。特にタカサゴ類は餌つきも良好で蓄養に耐え優秀な餌といわれているので、以後の調査研究において特に留意する必要がある。

テンジクダイ科魚類は餌として優れているとされ、この海域にも分布しているが、集魚灯による採捕は不可能のようである。この他カマス類、スズメダイ類、ヒイラギ類等も餌として使用し得るが、量的にはさして重要とは考え難い。しかし活餌という条件を考えた場合、単一魚種ばかりが採捕、使用されるとは限らないので混獲物としては注意に値しよう。

(2) 沖縄周辺のカツオ漁況と海況の相関

友 利 昭之助

沖縄周辺のカツオ漁況と沿岸水温との関係をみると明らかな相関関係はみられない。しかしながら、豊漁年のパターンは水温変動の幅が小さく安定し夏季は平年並である。凶漁年は水温変動の幅が大きく不安定で夏季平年比低目である。また並漁年、豊漁年の共通点は冬季にやや低目を示している。従って水温変動の安定度が漁況の目安になると言える。

活餌採捕量とカツオ漁獲量の関係をみると59%であったが、活餌がカツオ漁業の死命を制しているとは言うまでもない。本県の活餌はキビナゴ、タカサゴ幼魚、テンジクダイが主体をなし年間250屯程度が採捕されているが明らかに年変動がみられる。沖縄島本部半島沿岸域においてキビナゴの発生量の良い年は前年の夏季水温が高目で変動幅が小さく安定している。

宮古島沿岸のタカサゴ、テンジクの発生量の良い年はその年の春季に水温がやや高目で変動が小さく安定している。これらの傾向がみられることは活餌発生量の長期予報の材料となる。

表1 かつお餌料について

地 域		隻数	漁具・漁法	主な魚種	漁 期 間 採捕量 トン	餌 場 面 積 km ²	採捕量 km ²
沖 縄	本 部	5	四ツ張	⊕ ⊙	3.6~8.2	37.70	0.9~2.1
	ケラマ	6	追込、敷網	⑦ ⑧ ⑨	5.5~6.9	146.23	0.37~0.47
宮 古	池 間	9	追込	⊙	} 3.1~5.9	165.72	0.18~0.30
	佐良浜	7	追込、袋網	⑦ ⑧			
八 重 山	石 垣	26	追込	⑦ ⑧ ⑨	} 7.1~9.5	205.48	0.34~0.47
	竹 富	6	追込	⑦ ⑧ ⑨			
	与那国	1	追込、敷網	⊙			
全 沖 縄 計		62			235~263	555.13	0.42~0.47

1966年~1968年 隻数は1966年